

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

時ならぬ夜を引き裂きて冬の雷

森元二美子

(評)雷は夏の季節に多く起きる現象である。俳句でも夏の季語とされているが、地球の異変も取り沙汰されている今日、思わぬときに意外なところで起きる気象異変が、しばしばある。この句の冬の雷もそうした、正に時ならぬ夜中、そして冬である。「夜を引き裂く」に作者の驚きの様子が鮮明に表現されている。

黄落の樹間を遠く岩の峰

友草 水月

(評)秋の山の樹の葉が落ちて樹に透き間ができ、そこから高山の峰を見ている。堂々と大空を領し、樹間に見える一切のものを消して、秋の岩山と作者だけの世界を現出した、自然の息吹がそこにある。十七文字に詰め込んだ自然の姿はすばらしい。

石路の花押せば裏木戸ギーと開く

刈谷 志津

(評)情景がよくわかる句である。おそら

く無住の屋敷か留守家であろう。作者とのかかわりも凡そ見当がつく。裏木戸を開けて庭に入ることのできる人は、もとその家の住人か、一・三親等以内の人で裏木戸の開くことを承知の者。石路の花は然程の^{さほど}手入がなくても、精神的な繁殖を見せるその情景が裏木戸を開けた眼前を驚かせている。「ギーと開く」の効果が抜群。

銀杏の匂い忘れず札所寺

川上こよね

(評)「札所寺」は仏教の霊場の称、巡礼者が札を受けたりおさめたりする寺。この句の寺はさしずめ四国八十八ヶ寺であろう。銀杏落葉は冬、銀杏もみじは秋、匂いのするのは銀杏の実である。実はもみじと落葉の期間の間に落ちる。慣れない人は鼻につくが、種は珍珠で高級料理に使用されたりする。銀杏のある寺は何ヶ所もあり、限定された寺ではなく単に銀杏の^{にお}いの忘れられない札所寺で、季節を感じさせる句である。

西方に七色のアーチ今朝の冬

森岡 照月

(評)虹は常に太陽の反対側に見られる。朝は西、夕は東の空である。季節は夏に多いがこの句の虹は冬。季節外れの朝の虹、朝虹は雨、夕虹は晴れといわれているが、果たし

て美しい七色のアーチは雨になるのか、晴れであるか。とかく虹には夢が付きもの。

片減りの男の靴にある秋思 間 浩太
亡き夫の齢をこえたる菊まつり 片岡 包女
眼鏡かけ画家の目となる菊の前 岡本とも子
梵鐘の余韻紅葉の山にかな 川村千因子
吹く風に語りかけるや秋へんろ 大川 節弥
立冬の一句育たずうたた寝す 小島 良
師の君の歌碑に幕引く紅葉寺 松岡きよ子
一と役を終えし段田や麦を播く 竹崎 光子
お馴染みの華売り来る野菊道 川村 博子
紅葉の三嶺山を征服す 筒井 眉躬
小鳥来る鉛細工師の指の反り 井上 郁子
鎌研ぐや背に気高く鳴の声 渡辺万利子
園児等の防災法被天高し 津田 久美
ポットミルク湯気の向こうの冬の夜 立木ゆう子
秋深む泡立ち草の黄の色 楠目 哲郎
落葉徑^はをしのべばついてくる 伊藤 たみ
それぞれに大正琴もつ良夜かな 弘瀬うき子
秋深し何やら侘びし日暮れ道 川村 愛
湯上がりのほてりを冷ます^み霰かな 筒井 一平
老い先の見えて愛しき文化の日 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」五句
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

電話 867-2133

今月のことも川柳

とつぜんにかが出てきて つかまえた
下八川小 1年 かきうちひろき
うさぎさん とんでばかりで つかれそう
伊野小 1年 ひがきようか
ダイエット 秋になったら リバウンド
伊野小 2年 川村はるか
まごののに せなかをかくよ まごの手で
下八川小 3年 甲藤あやか
イチヨウの木 緑から黄色へ 秋になる
伊野小 5年 川村さやか

訂正とおわび

広報の11月号の「今月のことも川柳」掲載の
ども川柳」掲載の
勉強は 生きるための 通過点

伊野小学校6年片岡りなさま
は、伊野小学校6年片岡かな
さまの誤りでした。訂正いたし
ますとともに深くおわび申し
上げます。

社会教育課